

建築アーカイブの魅力 (CBRD NewsLetter 4 号/2008.6.30)

— 日本の鉄骨造のルーツ、サンテチェンヌ駅舎を探る —

著者：学会員 清水 健次

フランス中央部にあるサンテチェンヌ市は、中世より炭坑の町として栄えていたが、やがて産業革命で急速に発展し、製鉄・化学・機械工業が盛んな町となった。

1832 年には、サンテチェンヌ〜リヨン間約 60 km にフランス最初の蒸気機関車が開通し、1857 年に最初の駅舎が完成した。しかし、この駅舎は 200 本以上も掘られた坑道の影響もあって毎年のように嵩上げ工事を行わなければならなかった。

そのため 1886 年に軽くて一体的な鉄骨造に建替えられた。この 2 代目駅舎は、1987 年に TGV がパリ〜サンテチェンヌ間に開通されるまで供用されていた。

1980 年にフランスを訪れた細谷安太郎氏は、再建されたサンテチェンヌの駅舎の由来を知るにおよんで、地震国でもあり軟弱地盤の多い日本にとって、鉄骨造が適していることを知った。

帰国した細谷氏は鉄骨造の利点を力説していたが、秀英舎の社長の耳に入り日本初の鉄骨造が、1894 年に銀座の数寄屋橋に「秀英舎印刷工場」として誕生することとなった。



写真 1 最初の木骨・組積造駅舎-1857 年
(サンテチェンヌ古文書館提供)



写真 2 建替えられた鉄骨造駅舎-1886 年
(サンテチェンヌ古文書館提供)



写真 3 現在の鉄骨造駅舎-1987 年